

2020年10月3日(土) かぶとむし幼虫教室

【学習会の内容】

市内では採集することが難しくなったカブトムシの生態を学習すると同時に、卵から成虫まで暮らすことができる環境について学びました。

幼虫は持ち帰ることもできますので、家で生態を観察しながら、飼育することの責任も学びました。

※この学習会は、江南団地自治会様とUR都市機構様のご協力の下、行いました。



【学習会の様子】



NPO法人トンボと水辺環境研究所の川口先生と宮田先生の指導のもと、江南団地の森に設置されたコンポスト(※)にて、かぶとむしの幼虫探しが始まりました。

参加した子どもたちは頭に土をかぶりながら、一生懸命に探します。

残念ながら、かぶとむしの幼虫は見つかりませんでしたが、よく似たこがねむしの幼虫が数匹発見されました。

そのほかにも、森の中でバッタを見つけたりと、様々な生き物を発見することができました。

子どもたちは「これなあに？」と先生に尋ねながら、昆虫や植物に触れ、身近な自然環境について楽しく学びました。

※コンポスト・・・落ち葉を集めて腐葉土化させるもの



先生たちが用意したかぶとむしの幼虫を、夢中で掘り出します。10月頃の幼虫は「3令幼虫」といわれる時期で、人が少しなら触っても大丈夫だそうです。

かぶとむしの幼虫を飼うためのプラスチックケースの大きさから始まり、土の交換、霧吹きを吹きかける頻度など飼い方にかかわる説明がありました。



「先程外で触った土と、今ケースに入っている土の違いはわかりますか。少しだけ、ケースの土の方が湿っているのがわかりますか。これが知るということです。」

今回、僕が教えたことが分からなくなったら、図鑑でもインターネットでもいいので、自分で調べてください。その行動が、将来自分のために必ずなります。」



この学習会を通して、カブトムシを始めとする昆虫たちが生きるためには、豊かな土や緑はもちろん、気温の変化や雨などの自然環境が大切なことを学びました。

みんなが大好きなカブトムシ。なぜ見かけることが少なくなったのか？

将来に向けて、カブトムシを守っていくためには、どのようなことが大切になるかを考えてみましょう。

